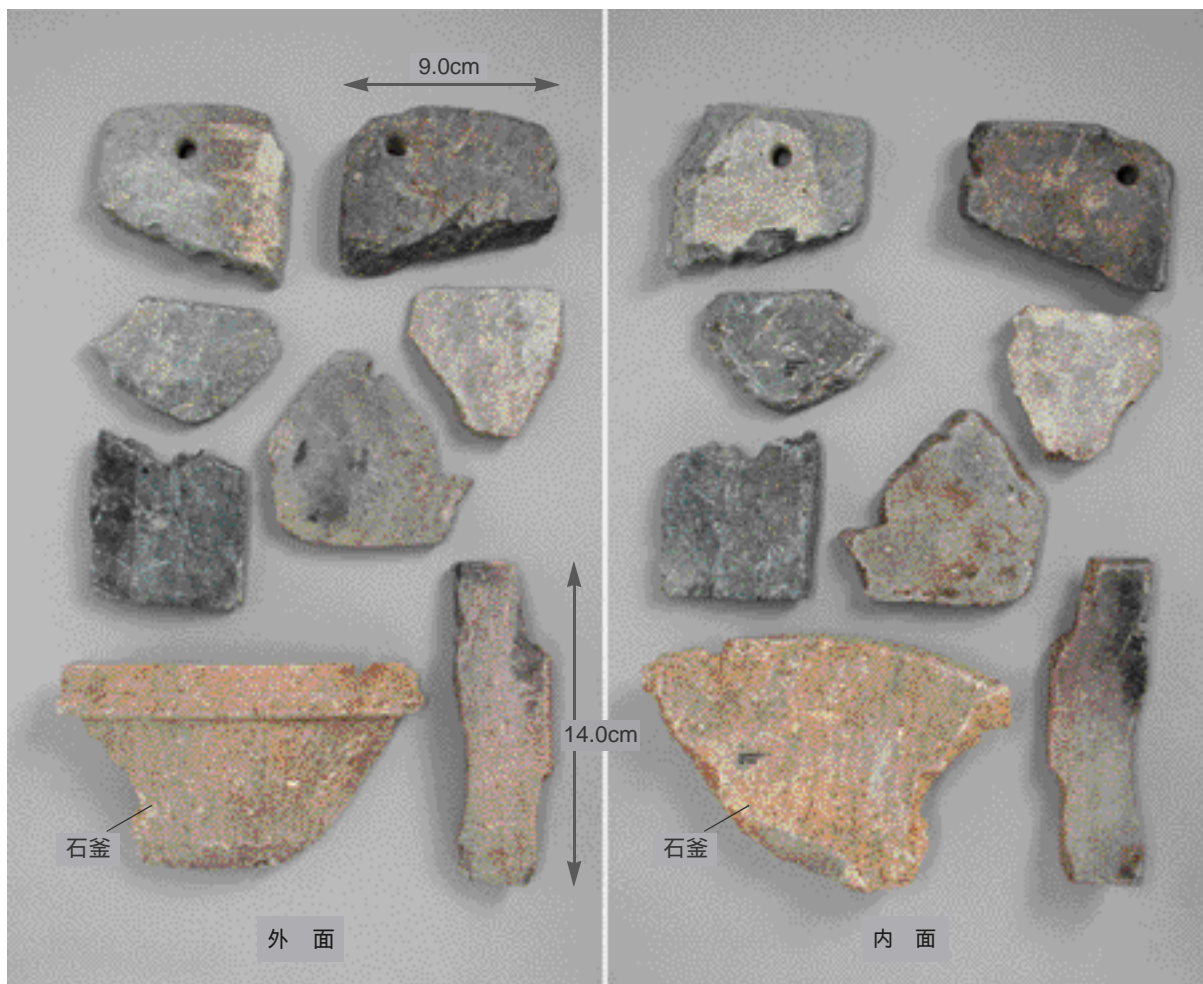


温 石

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



中世の遺構から見つかった転用品の温石と石釜の破片

京都御苑内の発掘調査で出土した中世の遺物を整理していると、滑石製石釜と思われる破片が46点見つかりました。

中世の転用品 その内の7点は石釜の鏝つばを削り取り、擦って平坦にしています。裏面も角張った箇所を擦って、体に沿うように成形しています。また、その中の4点には1孔、1点には2孔の穴があけられています。

これらを調べていくうちに、滑

石製の石釜を転用した「温石」であることがわかりました。とするならば、この穴は、紐を通したり石を加熱した後に火箸などで取り扱いやすいようにあけられたと考えられます。

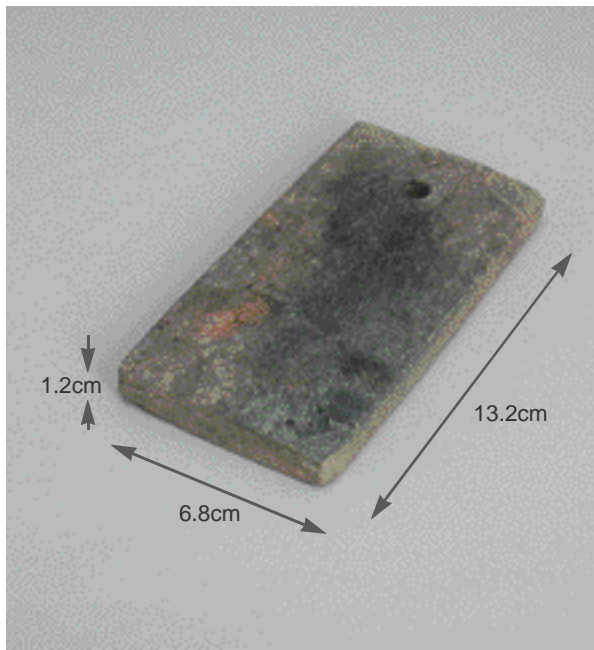
ためしに、これらの石を熱湯につけて温め、タオルにくるんで温度の変化を調べてみると、室温24で2時間後でも38を保ち、保温力のある事がわかりました。

温石 その字の通り、石を直接

火で熱したり熱湯に入れたりして温め、布などに包んで暖をとる携帯の暖房具です。しかし近世になると、石に限らず土製品や瓦、塩を焼き固めたもの、塩を混ぜて炒った糠ぬかなども用いられたようです。

また、温石は暖をとるだけではなく、腹痛や神経痛の患部に当てて温熱治療用具としても使用しました。

ほかに「薬石効なく...」に使われる「薬石」の石は石針に由来し



近世の温石



文献にみる温石

ますが、禅宗では修行中の飢えしのぎの為に温めた石を懐に入れたことから、軽い食事を薬石・懐石と称するようになりました。このように、懐石料理とは本来、温石で腹部を暖めるのと同じ程度に空腹をしのぐ簡素な料理のことです。

近世の温石 同じ調査地から近世の温石であろうと思われるものも数点出土しています。

頁岩あるいは粘板岩を長方形の板状に加工し、上部中央に直径1cmほどの穴を開けたもので、大きさは横6～7cm・縦12～13cm・厚さ約1cmです。石の四隅は角を落としてあり、ちょうど大人の手のひらに収まるほどの大きさです。これらは転用ではなく専用品として作られたようです。

近世の温石としては、東京都の汐留遺跡から滑石、結晶片岩、砂質凝灰岩などを加工したものの33点のほかに、瓦を加工したのも1点出土しています。

また、同じく麻布台遺跡、三栄

町遺跡などからは円形もしくは長円形の平面を持ち、厚みのある板状の土製品が出土しており、これらの多くには刻印が捺されていることから「有印土製円盤」と呼ばれ、土製の温石ではないかと考えられています。しかし、類例が少なく推定の域を出ていません。

近世の史料 江戸時代の文献で、寛政元年（1789）に出版された『頭書増補訓蒙図彙大成』という子供のために書かれた事典には温石の解説に、「火に温めて、火のしとしても使え、長い病気を回復させ、悪い血をちらす」とあります。図が載っていますが、その形は今回の出土品と同じとは言えません。使い方は、おそらく石を布でくるんだであろうと思われ、穴にひものようなものを通して腰に巻いたか、袋状のものに入れて身につけたのかも知れません。

関係する資料は少なく、衣類・什器・風俗などの資料をのせている『守貞謄稿』や江戸の買物案内

書である『江戸買物独案内』にも温石という製品は見られません。

懐炉の歴史 石を使った保温は、古くは平安時代後期の『大鏡』に、「焼き石のように御身に当てて持ち給へりけるに…」とあり、「焼石」と呼ばれて温石と同じ使われ方をしていたようです。

保温性が高く加工しやすい種類の石を利用した温石は、江戸時代中頃に「懐炉灰」が発明されるまで、形を変えて長く利用されてきました。

懐炉灰は麻や穀物を炭にしたものを粉末にして、袋詰めや練り固めたものを銅製の筒の中で燃やしたもので、これが近代には触媒を使って発熱させるベンジンカイロや、現代の使い捨てカイロにつながっていきます。

懐炉の元祖である「温石」についてはまだ詳しいことはわかっていません。今後、研究の余地は大いにあると思います。

（大立目 道代）